

南山城の歴史と未来



高嶺小学校と高嶺中学校の
地中に眠る南山城。1985
年に糸満市指定文化財となっ
ていますが、その歴史を皆さ
んは知っていますか？
今月号では、三山時代と言
われた当時の南山を振り返り
ながら、南山城が秘める可能
性に迫ります。

三山時代の到来

12世紀終わりごろから各地の丘陵上に防御された集落が形成され、按司と呼ばれるリーダーが現れます。按司たちは、グスクと呼ばれる城塞を拠点に勢力を広げ、やがて他の地域と争いを重ねる戦国時代(グスク時代)に突入します。

14世紀になると、各地の勢力は次第に3つの大きな勢力にまとまり、それぞれの地を治める王が現れました。彼らは明(当時の中国)と国交を結び、中国側から「山北」「中山」「山南」と呼ばれるようになります。この時代は「三山時代」と言われます。

私たちが普段耳にする「北山」「南山」という呼び方は通称であり、多くの古文獻上では「山北」「山南」と記されています。本記事では通称の「南山」で表記を統一します。

南山の歴史と勢力

南山や南山王に関する古文獻は限られ、その実態はいまだ

多くの謎に包まれています。

古文獻に「南山」の名が初めて登場するのは1380年。承察度という人物が、南山王として明の招きにに応じて使者を派遣したことが明の古文獻に記されています。このような交流は朝貢や進貢と呼ばれ、南山からは馬や硫黄、明からは官服や陶磁器といった交易品が贈られました。また、南山は交易品のほか、明の先進文化を導入するために留学生を送るなど、実に約50年間で34回の朝貢を行い、三山の中で2番目に多く行ったとされます。

南山は、沖縄本島南部一帯(現在の島尻地域)を治めていたとされ、古文獻によって多少の差はあるものの、現在の糸満市、南城市、豊見城市、南風原町、八重瀬町などがその範囲に含まれていたようです。ただし、統治の実態は非常に複雑です。古文獻上で確認できる王名は、最初が承察度、次に汪応祖、最後が他魯毎の3人の南山王が記され、汪応祖は兄によつて殺害されたとの記述も残っています。朝鮮王朝の

古文獻には、温沙道という南山王が亡命して来たと記されていますが、3人の南山王との関係は分かっています。

2つの大里城

南山王の居城としてよく知られている南山城跡ですが、文獻では「大里城」や「高嶺城」と呼ばれていました。なぜ「南山城」や「南山王」と呼ばれるようになったのでしょうか。

古文獻によると、「南山王」という名は、大里按司が自分で名乗ったものとされています。按司の名前は、統治していた土地の名前がつけられることが多く、大里按司は大里地域を拠点にしていた按司ということになります。つまり、大里按司が「南山王」と自称したこと、彼の居城だった「大里城」が「南山城」と呼ばれるようになったと考えられています。

なお、南城市にも「大里城跡」があります。一般的には、糸満市の「大里城跡」を「島尻大里城跡」や「南山城跡」と呼び、南城市の「大里城跡」は「島添

歴史をひもとき

糸満の誇りに

大里城跡、「島添大里グスク」と呼び区別していますが、時期により南山王の居城が変わったと考えられています。昨年、高嶺小学校で発掘調査が行われ、戦前の校舎跡に加え、南山城跡の石垣や建物の柱穴などが確認されました。今後の継続的な調査と研究により、全体像がさらに明らかになっていくでしょう。

遙か昔、この地に王が住み、民を統治し、一時代の繁栄を築いた。南山城跡の調査は、そんな壮大な物語に命を吹き込み、忘れられた歴史をいまに甦らせるものです。大地の奥深くに眠る記憶を掘り起こすことで、私たちのまちは、新たな誇りが生まれる可能性があります。また、かつてのこの土地の魅力は、文化や景観と結びつきながら、再び人々を惹きつける力になるでしょう。南山の物語はゆつくりと、まちの未来を照らしはじめています。

南山の歴史 × 糸満ハーレー

糸満ハーレーの起源

県内のハーレー・ハーリーの起源について、はっきりとした定説はありませんが、琉球王府が編集した『球陽』の中の1説では、南山王・汪応祖が中国留学時代に見た舟を建造させ、豊見城城下の漫湖で遊覧するのを見た人々が真似をしたことで始まったとされ、同じく、琉球王府編集の『琉球国由来記』では、那覇で行われていたハーリーが、南山の貿易港であった糸満に伝わり、糸満ハーレーが行われるようになったと記されています。

糸満ハーレーと島尻大里ノロ(山川ノロ)

かつて南山城内の拝所を拝んでいた島尻大里ノロは、糸満ハーレーとも深い関係がありました。島尻大里ノロはタマユシヌウェヌルとも呼ばれ、糸満ハーレー歌では、「玉寄ぬ御祝女 ただやあやびらぬ 三か村男達 うかくいみそり(タマユシヌウェヌルのお力は並々のものではありません 三村の男たちをどうかご加護ください)」と歌われています。また、ハーレー当日、島尻大里ノロは字糸満のカミンチュらに手厚く迎えられ、山嶺毛や白銀堂などの拝所で御願を行い、競漕を終えたハーレーシンカを祝福したそうです。

汪応祖と他魯毎と山嶺毛

古文獻に記されていませんが、南山最後の王である他魯毎は中山王・尚巴志に攻められて南山城が落城した際、西へ逃げ、山嶺毛に追い詰められて自刃したという伝承が残されています。また、山嶺毛の下には「南山王他魯毎之墓」があり、他魯毎のものとされる石棺があります。琉球王府の正史『中山世譜』で、他魯毎は汪応祖の子と記されており、もしかすると、現代でも力強く鳴り響き、南山の繁栄を今に伝えるハーレー鉦の音を聞きながら、在りし日の父を思い浮かべて他魯毎は眠っているかもしれません。

